



信州大学 経済学部同窓会報

第 13 号

発行 者 信州大学経済学部同窓会
同窓会事務局 〒390-8621
長野県松本市旭3-1-1
信州大学経済学部内
TEL・FAX0263-37-2309

平成24年4月5日発行

E-mail : k_doso@shinshu-u.ac.jp
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

第十三号の紙面より

- 同窓会設立30周年にむけて
矢口晋司
- 学長あいさつ
山沢清人
- 理事会報告
- 八ヶ岳自然と森の学校だより
高木保夫 (1977年入学)

- 連載 ゼミ「今」
—後輩達のゼミ紹介—
広瀬ゼミ
古屋ゼミ
- 会員による業界展望
(「現代の産業・社会事情」担当講師)
清田浩之 (1985年入学)
藤原聡子 (1988年入学)
古旗尋美 (1990年入学)

- 会員のたより
矢崎幹明 (1968年入学)
長澤靖真 (1987年入学)
井出由紀子 (2005年入学)
青井智弘 (2007年入学)
- 平成24年度総会・同窓会設立
30周年記念行事案内
- 編集後記

同窓会設立30周年に向けて

同窓会長 矢口 晋司
(1978年入学)

信州大学経済学部同窓会員の皆様におかれましては、各分野で広く活躍のこととお喜び申し上げます。平素より、母校の発展ならびに同窓会活動に対し何かと関心を頂きありがとうございます。

卒業ならびに入学の季節を迎え、我が同窓会も新たな会員の皆様と準会員の皆様をお迎えすることとなりました。この時期が巡ってくる度に、会員の皆様方にご満足頂ける同窓会活動とは如何なるものなのか、またその実現に向け何をすべきか等を自問自答するわけですが、なかなか具体的なイメージが固まらず、ただただ時間だけが過ぎていくという悩ましさを痛感する状況が続いております。今後も、理事会ならびに幹事会を通じ、この永遠のテーマとも言うべき課題に取り組んでまいりたいと思います。

さて、今年度の同窓会活動を展開するにあたり会員の皆様方にご理解とご協力をお願いしたい事が二つございます。まず一つ目ですが、平成二十四年三月十九日に設立三十周年を迎えました、我が経済学部同窓会の記念行事についてです。昨年の総

会で決定頂きました、記念行事は平成二十四年七月十四日に開催すること、記念DVDを制作すること、記念祝賀会を会費制で行うこと、記念行事の予算は上限四〇〇万円とすること、実行委員会を設置し運営管理を行うこと等に従い、理事会、幹事会、実行委員会の場で検討を重ね、有意義な記念行事の実施に向け努力を重ねております。記念式典には多くの会員の皆様方にご参加頂き、思い出に残る素晴らしい記念行事にしたいと考えておりますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

また、記念DVDの制作にあたり、同窓会員の皆様方から広く寄付金をお願いいたしましたところ、趣旨をご理解頂き、二月末現在で一八〇名の皆様方より七四、〇〇〇円という多額のご寄付を頂きました。この場をお借りして深く御礼申し上げますとともに、記念にふさわしいDVDの制作に向け、有効に活用させて頂きたいと思っております。

さて二つ目ですが、再三再四お願い申し上げます、終身会費納入に関しましてのご報告並びにご確認についてです。平成十九年十一月の総会におきまして、終身会費一万円徴収を決定頂き、文書にて、会員の皆様方に終身会費一万円の納入をご依頼申し上げたところ、趣旨をご

理解頂き、二月末現在で一、一四二名の皆様方よりお振込みを頂きました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。しかしながら、私どもの説明不足が原因で、まだ多くの会員の皆様方に終身会費徴収の趣旨をご理解頂くことができません。お振込み手続きを完了して頂けない状況となっております。皆様方もご承知の通り、国立大学独立行政法人化以降、大学を取り巻く情勢は非常に厳しい状況となっており、経済学部も削減された研究費の中で成果を期待されるという極めて厳しい環境となっております。同窓会としても学部における学術研究並びに地域連携等に対し、資金面も含め支援体制を検討していく必要性を強く感じているものの、同窓会の財政状況も決して潤沢とは言えず、具体的な支援検討を進められない状況となっております。同窓会全員の皆様方の深いご理解を頂く中でこの難局を打破していきたいと考えておりますことから、この場をお借りし、終身会費の納入を再度お願い申し上げます。昨年来の自然災害で被災された皆様方の一日も早い復興をお祈り申し上げますと共に、同窓会員の皆様方より一層のご活躍ならびに同窓会の一層の発展、成長をご祈念申し上げます。会長あいさつとさせていただきます。



学長あいさつ

信州大学学長 山沢 清人

信州大学経済学部同窓会の皆様には、平素より信州大学の教育研究にご支援を賜り、誠にありがとうございます。

晴れて卒業や修了を迎え、信州大学を巣立った皆さん、門出をお祝い申し上げますとともに、これからの新しい世界での活躍を祈念いたします。

平成二十四年度は、信州大学経済学部同窓会設立三十周年という記念すべき年であり、長年にわたって伝統を築きあげてこられた同窓会の皆様に改めて敬意を表します。

昨年は、大きな災害を経験した大変厳しい一年となりました。三月十一日の東日本大震災、それによる千年に一度と言われる大津波そして福島第一原子力発電所の炉心溶融に伴う放射能漏れと広域汚染、三月十二日未明に起きた長野県北部地震、さらに六月三十日には松本での直下型地震と、被災地はもろろんのこと、日本中が不安な一年を過ごしました。

信州大学では、信州の「知の森」として、防災研究の推進と県民の皆様への防災知識の普及を図るため、県内四地域で連続防災講演会を開催したり、栄村の地震災害調査を実施したりしたほか、毎年行なっている放送公開講座でも、平成二十三年度のテーマを防災とい

ました。

被災地の復旧・復興は多くの人々の努力によって着実に進んでいます。しかし、地震予測とその防災技術、原発の安全技術など、今回の震災をきっかけにして日本社会の安全とエネルギーの基盤技術に不安を感じる人が増え、先端科学技術ひいてはその担い手である大学への不信に繋がりがかねない状況が散見されました。それと同時に、安全・安心な新しい社会システムの構築に資する人材は必須であり、若い有能な人材の育成を大学に託す機運も高まっています。

このように、震災を機に、人類の継承(教育)と新しい知の創造(研究)という大学の本来の社会的責務を果たすことが強く求められています。特に、国立大学にとつてはこの要請に応えることが最重要なことであります。理系の科学技術はもろろんのこと、社会づくりのためには文系の知見が必須であり、経済学や経営学、法学を専門領域とする経済学部の果たす役割は、従来以上に大きくなっているといえるでしょう。

その好例として、昨夏に松本市で開催された国連軍縮会議に関連して、信州大学経済学部による外交講座「核軍縮・不拡散」や「平和と軍縮問題を考える勉強会」等が行なわれたことが挙げられます。この軍縮会議は、原子力の平和利用というタイムリーなテーマでも討論が行なわれたことから社会の注目度が高く、経済学部をはじめとする市民による関連イベントが多数行なわれたことで、「平和都市 松本」のアピールに貢献することができました。産業界の経済活動や一般国民の社会生活に直結する分野を専門とする経済学部として、さらなる活動が期待されます。

そこで、経済学部同窓会の皆様にも、信州大学の一員として、大学の動向をご理解いただきたく、ご紹介させていただきます。信州大学では、昨年十月に「知の森」づくり(PLAN "the FIRST" 2011-2013)を策定いたしました。第二期中期目標期間中に、中期目標・中期計画を確実に実行し、卓越した人材の育成などの国立大学に課せられた責務を大学の機能強化によって実現するための大学運営に関する基本的な取組です。このなかで、高度な専門的知識と豊かな人間性を持つ心豊かな人材を育成し、人類社会の持続的発展を目指し未来を創造する先端的な研究及び安全かつ安心な社会の構築に資する学術研究を推進することを決めています。信州大学は、国民の負託に応えるべく、PLAN "the FIRST"の遂行に、本年はさらに拍車をかけたいと存じます。

さて、信州大学が社会的責務を果たすための平成二十四年度事業を支える原資について簡単にご説明します。まず、文部科学省の大学関係予算です。大学改革の推進をテーマとし、国立大学関係には一兆一、六〇四億円(昨年比一、九億円増)、私立大学関係には三、五二二億円(一、四六億円増)、大学教育改革支援の充実として五七五

億円(七九億円増)と昨年と比して1.6%増となっています。さらに、科研費は4.5%増の二、三〇七億円、国立大学施設の整備として四七八億円の増の九一五億円と大幅な拡充となっています。

特に、国立大学関係一兆一、六〇四億円の内容を見ますと、国立大学法人運営交付金と教育研究強化基盤整備費は前者が前年比0.9%の微減の一兆一、四二二億円と後者が34.9%の大幅減の四三億円で減額されたものの、新規に国立大学改革強化推進事業一三八億円が創設されています。「大学改革」に関連する予算は総額七一三億円(三〇%増の二一七億円)となります。

この予算は、大学改革を実施することによって大学の機能強化を図り、国民の期待に応える高度な人材の育成及び安全・安心な科学技術の創生に努めることを大学に求めていると言えます。

新規創設の国立大学改革強化推進事業としては、第一には教育の質保証と個性・特色の明確化を目的とした教員審査を伴う学部、研究所の改組や双方向の留学拡大のための抜本的制度改革などがあります。第二には大学間連携の推進を目的として、互いの強みを活かした学部・研究科の共同設置、大学の枠を超えた大学間連携(企業公的研究機関などを含む)による教育研究の活性化などがあります。そして、第三には効率的な大学運営のための事務処理共同化などによる大学運営の高度化があります。

また、国公私立大学教育改革支援の充実として、五つの事業が挙げられています。

まず、(1)博士課程教育リーディングプログラム一、一六億円(七七億円増)です。これは、「新成長戦略の「リーディング大学院構想」を実現するため、成長分野など、世界を牽引するリーダーを養成する前期・後期一貫の優れた博士課程プログラムの構築を支援するものです。

次に、(2)卓越した大学院拠点形成支援補助金八〇億円(新規)です。卓越した実績を出した大学院に対し、研究に専念する環境整備に必要な拠点づくりの経費を支援し、世界で活躍できる研究者を輩出するシステムの構築のための補助金です。

(3)グローバル人材育成推進事業五〇億円(新規)は、学生のグローバル化を推進する全学的な取組みを支援するものです。国際機関海外企業などにおけるインターンシップ・プログラムの開発、海外協定大学での授業実施などの実践型研修などが考えられます。

(4)大学の世界展開力強化事業二七億円(五億円増)のうち、ASEAN諸国等との大学間交流形成支援は新規プログラムであり、七億円の予算が計上されています。この新規プログラムはASEAN諸国等の大学との高等教育制度の相違を超えた質保証の共通プラットフォームの形成や教育内容の可視化などアジアにおける先導的なモデルとなる大学間交流プログラム

の開発・実施を支援するものです。(5)大学間連携共同教育推進事業三〇億円(新規)は、国公私立の設置形態を越え、地域や分野に応じて大学が相互に連携し、社会の

要請に於ける共同の教育・質保証システムを構築することにより、強みを活かした機能別分化と教育の質保証を推進することを支援するものです。

以上が平成二十四年度の文科省の大学関係予算の概要です。

では、年末に信州大学に伝達されました「平成二十四年度運営費交付金予算額」の概略を簡単に説明します。運営費交付金総額は前年度比1.8%減の一四億二九四万円です。

このうち、一般運営費交付金は前年度比0.3%減の一八億八、一六九万円です。この減額は、大学改革推進係数△1.3%の減額と授業料免除枠の拡大増によりです。特別経費は一一億二、四五〇万円で、昨年度比九、三〇〇万円の減となります。この減額は、特別経費から一般経費への組替などによるものです。退職手当等の特殊要因経費は一三億九、六七五万円です。

このように、一般運営費交付金の大学改革促進係数(いわゆる効率化係数)は昨年と同様の1.3%となりました。文科省が言うように平成十六年度の国立大学法人化以降の基盤的経費の削減に歯止めがかかったとなります。しかし、人件費の削減は続きます。大学の独自性を発揮できる事業経費の原資は、この交付金に求めざるを得ないところですが、七割近くが固定費で占められている現在の状況では、独自事業も先細りです。

もちろん、震災と言う国難の折の予算編成ですので、贅沢をいうことは許されません。大学の生活費である一般運営交

付金が前年度比0.3%減で済んだことは文科省をはじめとする関係者各位の努力の成果と言えるでしょう。中期財政フレームに基づく予算編成は今後も継続すると考えられます。今後の高等教育関連予算が二十四年度並みとなる保証はまったくありません。国の歳出削減を実行し、公的債務残高を減らすなど、財政再建に向けた抜本的な取り組みが予想されます。平成二十四年度以降、人件費を含む大学運営の基盤的経費の削減は避けて通れないものと考えなければならぬでしょう。

今後、「人とお金の通減・縮減」を受入れて、遣り繰りだけで耐えていて良いのでしょうか。それでは、信州大学の未来はなくなりません。知の森は枯れてしまいます。平成二十四年度の文科省予算では、大学改革関連プロジェクトにリソース(七三億円)が投入されています。信州大学として、信州知の森を大きく豊かに育てるために、各種の大学改革プロジェクトに一層積極的に応募してまいります。平成二十四年度を「改革の年」とし、信大全構成員の叡智を結集して、人類知の継承と新しい知の創造に邁進する信州大学を造り上げていく所存です。

信州大学関係者の皆様一人ひとりが信州大学の将来を考え、行動することによって、必ずや個性輝く大学としてさらに大きく発展できるものと信じています。経済学部同窓会の皆様にも、今後ますますのご理解とご協力をお願い申し上げます。

同窓会理事会報告

日時：平成23年9月10日(土)
午後2時より

場所：信州大学経済学部研究会室

- 1 開会(樋口教授)
- 2 経済学部長挨拶(長瀬副学部長)
- 3 同窓会長挨拶(矢口会長)
- 4 報告事項
- 5 協議事項

- (1)同窓会連合会活動報告等
- (2)東京同窓会開催 平成24年2月4日(土)

- (1)終身会費徴収状況について
23年8月末現在1,087名であることを確認。
入会金及び終身会費両方とも未納者 1,951名。
- 同窓会事務局へ照会すれば、納付状況を確認できる旨を周知する。

- (2)同窓会設立30周年記念行事について
予算案 上限400万円。
来賓招待者 小湊名誉教授ほか
歴代教授の招待 参加の可否について10月中旬に照会する。

- 寄付金について
個人のみを対象として、一口2,000円。三口以上は祝賀会の会費を無料とする。
- 実行委員会の設置
理事、幹事の中より実行委員を選出し、内容ならびに運営方法の検討を行う。

▽運営部会：当日の円滑なる

進行に向け対策を検討する。

- ▽記念DVD制作部会：DVDの企画内容を検討する。今後、幹事及び現役学生に、実行委員への参画を呼びかける。
- 記念式典について検討。
- 記念DVD制作について検討。
- DVDの内容、討論会、パネルディスカッションなどについて今後の実行委員会で詰めていくことを確認。
- 記念品について検討。
- その他
- (3)その他
- ・会員の活動支援について検討。
- ・同窓会ホームページについて検討。
- ◎議長退任
- 6 閉会(矢口会長)
- ◎午後4時に閉会となる。

(会長)

日時：平成23年11月26日(土)
午後2時より

場所：信州大学経済学部研究会室

- 1 開会(樋口教授)
- 2 同窓会長挨拶(矢口会長)
- 3 経済学部より挨拶(長瀬副学部長)
- 4 報告事項

- (1)23年度同窓会活動報告について
・前回理事会以降の活動内容について矢口会長より報告。
- (2)その他

・高梨名誉教授お別れの会報告
・東京同窓会開催について
平成24年2月4日(土)にアルカディア市ヶ谷で開催されることを確認。

◎会則に従い、矢口会長を議長に以下について協議。

- 5 協議事項
- (1)終身会費徴収状況について
23年10月末現在、1,091名であることを確認(準会員は含まれていない)。
・連絡先住所を実家で登録している会員が多く、会員本人に届いていないケースが多いと思われる。
- ・会報発行時期について検討。
- ・次回会報発送時、同窓会設立30周年記念行事案内が同封されている旨を封筒に記載する。
- ・入会金及び終身会費納入依頼について検討。
- ・前記内容は次回理事会で再検討すること、並びに今後とも会員への依頼を重ね、徴収率を上げることを確認。

- (2)同窓会設立30周年記念行事について
①別紙DVD制作部会検討案について協議。
・次回理事会にて過去に長野朝日放送が制作したDVDを視聴する。
- ・今後も、DVD制作部会、理事会で検討していくことを確認。
- ②別紙記念行事資料にて確認説明。
- ・記念討論会について検討。
- ・記念品について
記念ラベル付ワインとし、2

- 00本確保することを決定。
記念式典に出席した現役学生(未成年者)にワインというのは問題あり。
コマクサの絵の木製キーホルダーや携帯ストラップが候補にあがり、次回理事会までに情報収集してくるようになる。
- ◎記念式典について
運営部会にて生協と交渉、検討する。
アトラクションについて、「和つしよい」「交響楽団」だけでなく、サークル協議会へも呼びかける。
今後も、運営部会、理事会で検討していくことを確認。
- (3)その他
・会員への活動支援について
次回理事会でも再検討することを確認。
- ◎議長退任
6 閉会(矢口会長)
◎午後4時10分に閉会となる。(会長)
- 日時：平成24年1月21日(土)
午後2時より
午後2時より
- 場所：信州大学経済学部研究室
- 1 開会(矢口会長)
 - 2 同窓会長挨拶(矢口会長)
 - 3 経済学部より挨拶(野地教授)
 - 4 報告事項
 - (1)23年度同窓会活動報告について
 - ・前回理事会以降の活動内容について矢口会長より報告。
 - 5 協議事項
(1)終身会費徴収状況について
- ◎会則に従い、矢口会長を議長に以下について協議。
- ◎議長退任
6 閉会(矢口会長)
- ◎午後4時15分に閉会となる。(会長)
- ・24年1月19日現在、1、136名であることを確認(準会員は含まれていない)。
ネットからの振込について、引き続き検討する。
- (2)同窓会設立30周年記念行事について
① 記念式典について検討。
② 記念討論会について
・各年代より5名程度、4月発行の同窓会報での募集を含め運営部会にて人選を進める。
③ 祝賀会について
・会場は大学生協のあづみホールで行いたい。3月の運営部会までに生協と打合せ。
- ④ 記念DVD制作について
・記念DVD寄附 24年1月19日現在、156名 628,000円であることを確認。
・長野朝日放送が制作した、佐久長聖高校駅伝部の視聴。
⑤ 実行委員に現役学生にも入ってもらおうと呼びかけたい。
- (3)同窓会員への活動支援について
・支部設立をめざし、地域なり、職域で開催するものに助成したい。
- ・引き続き前記内容について、検討していくことを確認。
- (4)その他
・卒業生による講義「現代の産業・社会事情」担当教授より、講師について推薦依頼あり。
随時、情報提供していくことを確認。
- 6 経済学部長挨拶(徳井学部長)
- ◎議長退任
7 閉会(矢口会長)
- ◎午後4時15分に閉会となる。(会長)

**開講します！
八ヶ岳自然と森の学校**

2012年度の八ヶ岳自然と森の学校の開講予定ができました。全部で17コースあります。各山小屋で、工夫を凝らした企画を取り揃えております。会員各位、一般の皆さま、八ヶ岳自然と森の学校にふるっの御参加をお待ちしております。申し込みは、直接、各山小屋へお願いします。

【問い合わせ先】 高木保夫 takagiya@po2.lcv.ne.jp

2012年 《八ヶ岳自然と森の学校》 開講予定

料金には、1泊2食付宿泊代、受講料、保険料が含まれます

No	日程	曜日	講座名	講師	宿泊場所	参加費	備考
1	4/7.8	土日	スケッチ(まだ雪の残っている「春山」を描いてみましょう) *柔らかなった春の日差しの中、スノーシューを使って夏沢峠まで	小倉 玲子 日本画家	夏沢鉱泉	15,000	(0266) 73-6673
2	5/12.13	土日	山菜の勉強会と北八ヶ岳トレッキング(根石岳まで) *里山での山菜採りと試食 2日目に樹木観察しながらトレッキング	大木 正夫 長野県林業大学校	夏沢鉱泉	15,000	
3	6/9.10	土日	高山植物の生態を学ぶ(ツクモグサ、キバナシャクナゲ等ご覧になれます) *環境の厳しい稜線で、可憐な花をつける貴重な植物たちを観察します	名取 陽 高山植物研究家	硫黄岳山荘	15,000	夏沢鉱泉と同じ
4	6/9.10	土日	希少植物観察会(保護活動について) 美濃戸周辺の希少植物の観察と保護活動について体験します	新井 和也 山岳ジャーナリスト	美濃戸山荘	12,000	(0266) 58-7220
5	6/9.10	土日	バードウォッチング 蓼科山周辺の野鳥を観察して、夜は山菜料理を堪能してください	遠藤 祐二 野生動物調査員	蓼科山荘	12,000	(0266) 76-5620
6	6/12.13	火水	バードウォッチング(里山から亜高山まで:オオルリ、キクイタダキ他) *溪流沿い、森の中の池、シラビソの原生林などで多くの種類を観察	林 正敏 日本野鳥の会	夏沢鉱泉	15,000	
7	6/16.17	土日	山岳地図の読み方・実践編(初級者~中級者向) 優しく、楽しく、学べる実用度の高い人気の講習会です	宮内佐季子	オーレン小屋	15,000	(0266) 72-1279
8	6/23.24	土日	写真教室:ネイチャーフォト(八ヶ岳フォトコンテストに応募) *初心者、熟練者にも対応 溪流、滝、クリンソウ、シャクナゲを撮る	日野 安喜 日本写真作家協会(JPA)	夏沢鉱泉	15,000	
9	6/30.7/1	土日	高山植物を知り楽しむ(ウルフソウ、チョウノスケソウ、コマクサ他) *八ヶ岳随一の群生地:横岳の花々を、確実にご覧になることができます	白鳥 保美 諏訪教育会植物委員会	硫黄岳山荘	15,000	
10	7/7.8	土日	フラワートレッキング・森~稜線の植生について 初心者~中級者向け 桜平~硫黄岳、横岳の花めぐり	斉藤 敏 長野県自然観察インストラクター	オーレン小屋	15,000	
11	8/25.26	土日	ミヤマシロチョウと生物多様性 美濃戸周辺のミヤマシロチョウと他の生物とのかかわりについて	福田 勝男 ミヤマシロチョウの会	美濃戸山荘	12,000	
12	9/1.2	土日	森の生態系を知ろう(里山から亜高山帯までの森をゆっくり歩きます) *樹木、草本、苔(こけ)、地衣類などを、じっくりと観察してみよう	大木 正夫 長野県林業大学校	夏沢鉱泉	15,000	
13	9/7.8.9	金土日	スケッチ(山の上で思いっきりスケッチ 大自然を体感) *初めての方も、たくさん描かれている方も一緒に楽しみましょう	小倉 玲子 日本画家	硫黄岳山荘	2泊3日 1泊2日	25,000円 15,000円
14	9/8.9	土日	初心者岩登りザイルワーク 岩登り未経験者の講習会 道具の使い方から学び8mの岩場を登降します	島田 良 八ヶ岳山岳ガイド協会	黒百合ヒュッテ	12,000	(0266) 72-3613
15	9/8.9	土日	ウォーキングスケッチ 手のひらサイズの手帳にて簡単スケッチを覚えましょう	神田めぐみ イラストレーター	美濃戸山荘	15,000	教材込
16	9/14.15	金土	キノコの勉強会と北八ヶ岳トレッキング(根石岳まで) *里山でのキノコ採りと試食 2日目に樹木観察しながらトレッキング	大木 正夫 長野県林業大学校	夏沢鉱泉	15,000	
17	9/22.23	土日	きのこ教室 蓼科山周辺のきのこを観察して、きのこ料理を堪能してください	小田 貴志 日本菌学会	蓼科山荘	12,000	

連載

ゼミ「今」

—後輩たちのゼミ紹介—

広瀬ゼミ

原口純一、大竹佳乃
菅沼 梢、山本健太

広瀬ゼミでは二年生と三年生合同でゼミを行います。前期のゼミではミクロ経済学の基本的な知識を学習します。逆選択やモラル・ハザード、シグナリング、インセンティブ契約などについて学習したり、計算問題を解いたりしました。先生が二年生でも分かるように細かく解説をしながら進めます。三年生にとっては、ミクロ経済学の復習ですが、改めて学ぶことで理解をより一層深めることができます。さらに、効用最大化問題や企業の利潤最大化問題について、ゼミ生でサブゼミを行い、わからない箇所については、先生も交えて勉強会を行います。大学のカリキュラムのミクロ経済学の講義を受けるだけでは、その内容を現実の問題に応用できるだけの知識が身に就いていないので、ゼミでの学習で理解が不十分な点を確認し、理解を深めていきます。

後期には、前期で学習したミクロ経済学の概念をより深く学習し、預金保険についての英語文献を読むなどしました。並行して、ゼミの演習論文について、各個人が発表し、それについてゼミ生でどうすればいいのか話し合ったり、先生に指導をしていただきながら進めていきました。また、論文の主張に説得力を持たせるべく、統計的なデータを処理する方法を学びました。たとえば、エクセルを使って年金の納付率について平均や分散などを計算したり回帰分析などをしたりしました。学年の垣根がないので、他のゼミ生の研究について互いに意見を言い合って、理解を深め合うこともできます。

三年生の私は、ミクロ経済学で扱う情報の非対称性について興味があり、中でも、企業と労働者の賃金契約におけるモラル・ハザードの問題を応用して、今、社会で問題となっている労働問題を、演習論文のテーマに選びました。まず文献を読んで理解する所から苦労しましたが、その次の苦労は、自分がたてた仮定をデータで証明することでした。自分では大丈夫だと思っても先生に指摘されてしまうと何も説明できないことが多々ありました。けれども、中途半端に終わらせるのではなく、最後まで論理的に終わらせる為に、先生の助言を参考に頑張りました。先生の指導は厳しいですが、理論をただ学ぶのではなく、それによって持った自分の意見をデータで説明して説得させる手法を学びました。二年生の私は、後期のレポート作成として、保険の理論についてまとめたり、家事労働の分担につ



います。

古屋ゼミ

伊藤 友博

古屋ゼミでは、「レジャーとは」をテーマとして、その理論と実践の追及を目指し日々活動をしています。主な活動内容には、前期と後期をおして行われるマイナースポーツ(ex. ゴルフボール、コーフボール、ワンバウンドフラフールパレー)の理論と実践、休日や長期休業を利用した合宿形式の活動(ex. 佐渡サバイバル合宿、山菜合宿、スキー・スノーボード合宿など)、またゼミ生個々人によるチャレンジの発表「熱夏」、そしてグループワークによる調査研究などがあげられます。それぞれ順を追って説明していきたいと思います。

まず、マイナースポーツの理論と実践ですが、そもそもマイナースポーツはマイナーと称されること、チャレンジするスポーツのことごとくが我々にとっては馴染みの薄い、あるいは皆無なものです。当然そのまま実施に及んでもスポーツとしての体をなさないもので、まずはそれらの概要やルールを確認するところから始まります。それぞれのゼミ生が自分の担当するマイナースポーツの概要やルールを事前に調査し、レジュメを作成して勉強会を行います。そして然る後に実践し、マイナースポーツへの見聞をさらに深めていきます。

つぎに合宿形式の活動ですが、長期にわたり過酷な合宿といえば、やはり佐渡島でのサバイバル合宿です。古屋ゼミで毎年行われる定例行事のようなものです。ゼミ生一同で本土を離れ新潟県は佐渡島へと渡り、海に程近い砂浜にある番小屋で五日間を過ごします。佐渡合宿が他の活動と一線を画す点は、食事のメインディッシュとなるものは全て海から調達しなければならぬことです。マスク・スノーケル・フィンを装着し海に潜り、ヤスを駆使して実際に泳いでいる魚やタコを捕獲します。この活動で島へ持ち込む食料は米と調味料のみですから、ゼミ生一人ひとりの狩漁・採取の成果が食卓の股賑を左右します。そのためこの合宿では、団体行動における協調性やリーダーシップを同時に養うことが可能となります。また、生きた魚を捕まえ、調理し、その「命」をいただくことは、自然の恵みと大切さを知る、非常に価値のある活動だと思っています。



つぎに「熱夏」という意味で、ゼミ生個々人がテーマを決めて何

かにチャレンジをします。それをパワーポイントにまとめ、得たこと、感動したことについて発表し、ゼミ生同士で採点します。オーディエンスを如何に感動させることができるかがポイントです。最近感動させられたものは、松本から三重県の実家までママチャリで帰省した発表でした。

最後にグループワークによる調査研究を紹介します。まずはテーマを決めるために、それぞれが自分のやってみたい調査研究のテーマと簡単な内容について発表をします。もちろんテーマはレジャーやスポーツに関することです。そしてその中から四〜五件に絞り、グループに別れ調査を進めていき、中間発表、最終発表となります。最近の研究テーマとしては、「運動パフォーマンスに対する音楽の効用」、「スポーツグッズの正しい選び方」、「筋トレのメカニズムとその効果」、「ニューゲームの創作(最強)」、「ギネス記録に挑戦」などがあげられます。

以上、古屋ゼミの活動を紹介してきました。古屋ゼミは、とにかく明るく元気なゼミだと思っています。そんなゼミの目標としていくところは、「経済学部の元気の素!!」となることです。さらにパワーアップして頑張っていきたいと意気込んでいます。OB・OGの皆さま、応援宜しくお願い申し上げます。そして最後になりましたが、このような機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。



会員による業界展望

「現代の産業・社会事情」担当講師

「旅行業」に勤めて

名鉄観光サービス(株)
清田 浩之
(1985年入学)

二十一世紀に入り様々な出来事が旅行業界に大きな課題をもたらしました。二〇〇一年九月一日

アメリカで同時多発テロが発生、二〇〇四〜五年 鳥インフルエンザ流行、二〇〇五年 燃油サーチャージが航空旅客で導入、二〇〇九年 新型インフルエンザ流行、二〇一一年三月一日 東日本大震災というように。バブル期の一九九〇年当時、旅行会社も華やかなサービス業の一つで、入社したての新入社員でも企業へ営業に行けばいろいろな仕事を受注することができ、一ヶ月の間に何度も海外へ往復することもありました。一九八九年(平成元年)に名鉄観光サービス株式会社に入社した私もその恩恵を受け、この二十三年間に約九〇〇の国と地域を添乗員として回っています。

一般法人企業は社員のために慰安旅行・研修旅行を実施することでコミュニケーションと社員教育を行い、パートナー企業のために招待旅行や年間実績に対しての表彰旅行を行うことでより良い関係

を結びます。学校では修学旅行・研修旅行・林間学校・スキー教室などの年間行事があり、また官公庁では国内外の視察研修を計画と実施しています。そして学生の皆さんは学生最後の思い出と見聞を広めるために卒業旅行を楽しめるのではないのでしょうか。いろいろな形式、目的に応じた形態が旅行にはあります。

ところが昨今、学生の方々の海外旅行離れがおきています。金銭的な問題はあると思いますが、それ以外にインターネットによっていろいろな写真や動画を見ることにより、旅行に行った気分になり、それだけで満足し、その他の事に対して価値を重んじているからです。海外旅行者の年齢構成比を見てみると、二十歳代以下の渡航者数は、一九九九年(平成二年)に三三・三%だったものが、二〇〇九年(平成二十一年)には二五・三%に減少しています。

私はこの十年間で、日本人は災害に対して最も敏感で臆病な人種だと感じました。アメリカ同時多発テロが発生した当時、世界中の人々がアメリカへの渡航を自粛しました。ところが半年経っても、一年経っても日本人はなかなかビジネス以外でアメリカ旅行をすることはなく、その結果としてアメリカ国内で働いていた日本人ガイ

ドの方々も旅行という職から離れていくことになりました。

インフルエンザが猛威をふるった時も、東日本大震災の時も、誰かが動くのを待っていたような感じを受けます。特に昨年の東日本大震災は首都圏に大きな問題を投げかけました。連日の過剰なまでの報道によって自粛傾向は拡大し、風評被害を受けられた方々の生活を圧迫し、地震発生から六月頃までは完全に旅行業界は麻痺状態でした。日本人は「右に倣え」をします。そして「自粛が美德」だと勘違いをします。でも誰かが動き出すと一斉に動き出します。旅行もそうでした。「今年は控えた方がいいねえ」と言っていた企業が、秋には例年以上の賑わいを見せたのではないのでしょうか。日本人は「平均的」や「普通」を望んでいます。人と違ったことをして、人から言われることを嫌います。ですから他の国々に比べると、現状に戻るまで一歩も二歩も遅れてしまいます。しかし、教育旅行だけは行先の変更はあったにせよ、予定通りの日程でほぼ実施されていました。

二〇一二年は日本で本格的にLCC(ローコストキャリア)が国内線に参入します。多種多様な料金設定の下、顧客は自由に、希望に合った料金体系のものを選択することが出来ます。ただ利用するにあたり条件内容をよく確認し、理解しなければ思った満足は得られなくなります。燃油サーチャージが航空運賃よりも高くなることもあります。旅行会社の店頭に置かれているパンフレット商品

『募集型企画旅行』といいますが、現在ではこの商品の料金の中には燃油サーチャージが含まれていません。しかし航空券だけを購入した場合は、航空運賃の他に燃油サーチャージ、空港施設使用料等が加算されます。二〇一二年一月現在の燃油サーチャージは、日系キャリアで北米・欧州路線ですと片道二五、〇〇〇円、ハワイ路線で片道一六、〇〇〇円です。ベックス運賃(正規割引運賃)で安く航空券を買えたとしてもこれらを加算すると、それなりの高額料金になってしまいます。取消料も航空券の種類によって違うので、旅行会社に勤めている者でも確認が必要になります。顧客のニーズに合った多種多様な料金設定ができたことは良いのですが、勘違いされないうようなきちんとした説明や対応を旅行会社がして行かなければ、顧客の旅行に対する認識はより複雑なものとなってしまいます。

東日本大震災からの復興、LCCの国内線就航変化していく顧客意識。旅行を取り巻く環境は日々変化の中で、旅行業はこれからの方向性を模索しているのです。

社会人二十年を 迎えて今思うこと

(株)クレディセゾン
藤原 聡子
(1988年入学)

一九九二年に経済学部を卒業して(株)クレディセゾンに入社してから、早いもので九二十年となりました。この度「現代の産業・社会事情」を担当したご縁で、執筆の

機会をいただきましたので、この二十年を振り返り、これからの二十年を考えたいと思います。

おがましくも先の講義を担当させて頂いたのは「高梨昌ゼミ」の先輩から、経済学部の模擬「就職面接」を手伝ってほしいと半ば強制的(!?)に松本に出向き、緊張の面持ちの後輩達に、心を鬼にして叱咤激励を浴びせ、そのご縁で講義の依頼をいただきました。講義では、私が「学生時代の自分に伝えたいこと」というテーマで、私のキャリアや社会人になって役に立ったことなどをお話ししました。

私はゼンカード・UCカードを発行する(株)クレディゼンでずっと働いています。が、転職並にいろいろな業務を担当してきました。三年目でゼンカードの責任者となり五店舗を経た後、十年目に営業課長になりました。その後マーケティング部でカード機能の開発、二年間経済同友会に出向して政策マネジャー、社に戻って広報室、そして一昨年から営業企画部で「環境推進チーム」を立ち上げました。

二十一年間で十三箇所も職場が変わるのは少々聞かえが悪いのですが、各部署約二年間の在籍で一年目は立て直し、二年目は業績UP、さあ三年目は引き継ぎ準備!と思つていると次の辞令というパターンを繰り返しています。

今の環境推進チームでは、群馬県赤城山の南西麓に広がる二〇〇haの森「赤城自然園」の運営をしています。ここは人が入ることも難しかった雑木林を旧ゼンングル

ープが約三十年の年月と数百億円をかけて開発した総合自然園です。二〇〇八年に閉園したのですが、せつかく作り上げた次世代に引き継ぐべき素晴らしい森を荒廃させるべきではないと、二〇〇九年に当社が購入し、社会貢献活動のひとつとして運営をはじめました。

二〇一〇年四月の開園当初は、広報担当としてリリースを発表し、オープニングセレモニーでは司会を務め、それなりに関わっていたのですが、まさか運営を担当するとは思ってもみませんでした。突然の異動はいつものことですが、自然園の運営という畑違いの業務に戸惑い、また、旧運営から園を守っている園長と何かにつけて意見の相違で困っているのを横目で見ていただけに「私にできるのか?」という思いや「ややこしいから私に白羽の矢が立ったのか。やるしかないか」という不安と決意が入り混じった心境で着任しました。

既に社内公募で選ばれた元営業課長が開園から現地に赴任して日々の業務をスタッフとともにやっており、私の役割は本部での運営管理です。収支計画をつくり、ポンプ、浄化槽などの施設設備の補修・入替、来園者を増やすための広報活動、PR、ツアー誘致、イベント企画など多岐にわたります。しかし全くの素人の我々は一から勉強。何より神のように崇められていた園長の信頼を得ないことには、何もさせてもらえませんでした。最初の三ヶ月は週二回ペースで往復三百kmを通い、「座学ではなく、とにかく歩いて自分の

体で学ぶこと」という園長の教えを守り、ひたすら歩きました。今、二〇一二年度の開園を控え準備に奔走しています。「自然」は簡単に理解することはできないこともよくわかりました。今も週一回ペースで、雨の日も雪の日も歩いて「感じる」ことに専念しています。コミュニケーションの難しかった園長とも様々なことがありましたが、彼の原点は「自然園を守ること」とシンプルに受け取ると、とても理解することができました。



赤城自然園

私の仕事の原点は、担当業務とにたく好きになり、全神経を注いで業務に関わる分野に興味を集中させてその分野のプロになることに徹することです。二年ペースの異動のおかげで、新しい業務は取引先も含めて一ヶ月以内にマスター。後任者への引き継ぎは着任した瞬間からはじまる。ということとを学び、業務知識やスキルはたいたことありませんが、順応の速さ、マスターするまでの習得力

が身につきました。

現代社会の変化は著しく、三年後ですら予測が難しく、キャリア計画を立てることができません。むしろ順応力に磨きをかけてどんなに変化しても自己実現ができる環境に身をおけるよう、変化の波乗りをうまくできるような柔軟に、そして努力していかなければならないと思つています。

気がつけば「若手」から「中堅」になりました。この先二十一年で「老兵」にならないために、今までは異動をきっかけに自己のイノベーションをはかってきましたが、これからは自ら刺激を見つけて戦略的イノベーションをはかっていきたいと思つています。

「秘密の花園」と言われる赤城自然園は、四月七日に春の開園です。東京ドーム約十三個分の公開エリアに、十二万球以上もあるカタクリが春の訪れを告げ、アカヤシオ、シラネアオイ、ヤマシヤクヤクをはじめ様々な植物が咲き競います。五千株以上の東洋一のシヤクナゲは五月上旬下旬に見ごろを迎えます。皆様ぜひお越しください。

詳しくは: akagishizenen.jp

新しい医薬品の開発のために

キッセイ薬品工業(株)

古旗 尋美 (1990年入学)

「三万分の一、十数年、数百億円」さて、何の数字でしょう。か。正解は、医療用医薬品の開発コストです。皆さんや皆さんのご

族が今日飲んでる医療用医薬品は、三万個の薬の候補となる化合物の中から十数年前に開発を始め、数百億円をかけて、たった一つだけ製品化されたものなのです。

私は、ご当地松本に本社を置く製薬会社、キッセイ薬品工業株式会社で医療用医薬品の開発業務を担当しています。医薬品開発というと、秘密基地のような研究所でなにやら怪しい実験を繰り返しているところを想像する方もいらっしゃると思いますが(小説や映画の製薬会社はどうしていつも悪いヤツなのだろう?)、本当の私はいたって地道な?! 治験(臨床試験)の担当者です。新しい薬を発売するためには、新規物質を見つけ、取捨選択し、動物や培養細胞を使ってその有効性や安全性等を研究し、安全で実際に人に効果があるかを調べ、厚生労働省へ承認申請を行う必要があります。その中で、承認申請のために人の安全性や効果を調べる試験を治験と言います。

日本の医薬品産業は急激な変化が続ぎ、大変厳しい時代に入つて久しい状況です。少し古い統計で恐縮なのですが、一九九七年には一、四〇〇社あった日本の製薬会社は、わずか十年後の二〇〇七年には三八〇社になってしまいました。そのうち、主に先発医療用医薬品を製造販売する会社も、同四三六社から八二社となり、今では更に少なくなつています。

連日のニュースで、日本の財政悪化、急速な高齢化、社会保障費の増加など、様々な問題が取りざたされていますが、それらを背景

に日本の国民医療費に占める薬剤費比率は政策的に抑制されており、日本の医薬品市場は縮んでいます。現在、日本の市場は世界第二位ですが、この十年でシェアは三分の二になりました。

医薬品産業を考える上でもう一つの重要なポイントは、医薬品開発の特徴に起因する問題です。冒頭に述べたように、医薬品開発は成功確率が低く、開発期間が長く、多額の経費が必要であるにも関わらず、発売後の特許期間が短く利益が出にくいという特徴を持っています。研究開発費率は加速的に高まり、例えば日本の大手十社の研究開発費率は対売上高で二〇%にも及んでいます。このような状況の中、利益を確保し、画期的な新薬を発売し続けるために、日本を始め世界の製薬会社は、グローバル化、国際標準化、大型再編を繰り返しながら国際的な生き残り競争を行っているのです。

これまで、日本の医薬品産業の未来が少々不安になるようなことも書きましたが、皆さんがいち早く新薬にアクセスできるように、日本から製薬会社が絶滅しないよう、日本の会社もがんばっています。世界の売上高上位百位までの製品を、開発した国別にみると、日本生まれの医薬品は十二品目あり、日本はアメリカ、イギリスに続く世界第三位の新薬開発力を持っています。この世には約三万種類の病気があるのだそうです。このたくさんある病気の中には、世界中の製薬会社が日夜新薬の開発に奔走しているのにも関わらず、まだ薬がない、あったとしてもまだ

まだ満足できないものもいっぱいあります。癌や認知症など多くの人が罹る病気もあれば、非常に患者数が少ない希少疾患もあります。市場が大きく収益性が高い疾患だけではなく、こうした希少疾患を治す革新的な新薬を創ることも製薬会社の使命の一つです。そして、新薬を創るためには「治験」の実施が不可欠です。日本における治験の認知度はまだ低く、皆さんの中には今日始めてこの単語を聞いた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。もしこの原稿を読んで興味を持っていただけたのなら、治験についてちょっとだけ調べてもらえれば、またちょっとだけ身

会員のたより

どくとるマンボウ現象

矢崎 幹明
(1968年入学)

作家の北杜夫が昨年十月、八十歳で亡くなった。旧制松本高等学校から東北大学医学部へ進みながら、作家人生を送った異色の人が、私にとっては思い出深い存在だ。彼の『どくとるマンボウ青春記』が出版されたのは、私が信州大学に入学した一九六八(昭和四十二年)。松高や思誠寮を通じたパンカのような生活、医者であり歌人であった父・斎藤茂吉との葛藤、文学への道を探っていった青春の日々等

近な存在にしていただけなら、大変うれしく思います。
(参考) 日本製薬工業協会HP : <http://www.jpma.or.jp/medi cine/shinyaku/chiken.html>
私は今、糖尿病やドライアイといった患者さんが多い疾患や、脊髄小脳変性という希少疾患の開発に携わっています。開発の喜びは何と言っても自分が関わった医薬品が市場に出て患者さんに使ってもらえるようになることです。新薬により、一人でも多くの人たちが病気の苦しみから立ち直り、一日でも早く笑顔と喜びに満ちた日々を送れますように、私は今日も地道に仕事です。

を描いていた。大学という未知の世界へ入り込んだ当時の信大生に、大いにロマンを与えてくれた本だ。学内には、松高の教師からそのまま信大の先生になった人もおり、松高の雰囲気、わずかながら残っていた頃のことだ。
学生たちが特に興味を引かれたのは、「試験の答案」に関する記述だ。北杜夫は、物理の試験で「恋人よ、この世に物理学とかいふものがあることは海のやうにも空のやうにも悲しいことだ」といった内容の長詩を書いたのだという。
私も、この手を拝借した。生物だったか、心理学だったか科目は忘れてしまったが、答えられない問題にぶち当たると、「青春の苦悩」などと勝手な題をつけた文や

詩を書いて提出した。教養部(一年)で「不可」がなかったから、そんないい加減な答案も通じられたのだ。学生の「どくとるマンボウ現象」を、先生の側がどう見ていたかは聞いたことがない。「ぼか者たち」と思っていたのだからと想像する。そんな不真面目な態度も容認される、おおらかな時代だった。
もう一つ、北杜夫に影響を受けたのが思誠寮だ。もともと、寮という集団生活をしたいと思っていったところで、『青春記』に出合った。一年生の時は下宿し、学部へ進学すると同時に入寮した。「あがたの森」の北東端にあった木造のおんぼろな建物だった。掘りごたつで、燃料は豆炭を使っていた。寮には、『青春記』に「天下一品のバカ騒ぎ」「野蛮な行為」と表現された伝統が残っていた。前者はストームという。深夜、げたを履き「デカンショをがなりたてながら、寮じゅうの廊下をねって歩く」ものだ。『青春記』には「上級生が復活した」と書いてあるから、中断した時期もあったのだらう。ストームは、だいたい酔っぱらった勢いで誰かが「ストームやるう！」を言いだしてから始まる。

これをやられた方は、うるさくてたまらない。暗闇でその一行を待ち伏せて、バケツで思い切り水をかける。だから、冬などはストームをやった後、体が凍るほど寒く、布団をかぶってこたつへ潜り込んだものだ。
後者は、『青春記』には、「蒲団むし」とあるが、私たちは「簀(す)巻き」と呼んでいた。これは、深夜というより明け方に行く。ぐっすり寝込んでいると、数人が部屋にどやどやと入ってきて「南寮三号 やざぎ スマキ！」と宣言。

起る余裕もないまま、布団でぐるぐる巻きにされる。その後、簀巻きの犠牲者はリヤカーに乗せられ、松本駅まで寮歌を聞きながら運ばれる。やる側は、少し頑張ると縄がほどけるようにして、先に帰ってしまう。
当時の松本駅は、夏場は登山の若者たちが大勢、寝袋でごろごろしていた。そんな人たちの冷ややかな視線を感じながら、縄をほどいてリヤカーを引いて、とぼとぼと寮へ帰っていくのだ。『青春記』は、布団むしのことしか触れていないので、松本駅まで運ぶやり方は、その後に加えられた可能性がある。
このように書くと、アナクロなおおらかな学生生活だったとみられるだろう。が、当時は学生運動の全盛期で、自分たちが悩みや苦しみを一身に背負ったかのような思いで過ごしていた。二年生の時は、現在国の重要文化財として残る松高講堂などが封鎖され、学生同士でぶつかり合い石を投げ合っていた。三年生まであまり勉強をせず、にわか勉強を始めたのは就職試験という現実が身に迫ってからだだった。ただ、寮は自分にとって住み心地が良かったせいも、四年生を留年して丸四年過ごした。

信大は戦後の学制改革により一九四九年に誕生した。旧制松高を継承したのは当初の文理学部で、その後、人文と理に分かれ、さらに人文から経済が分離独立した。松高に対し、経済は子、孫よりさらに遠い存在かもしれない。しかし、そのDNAは、今も何らかの形で受け継いでいるのではないかと思っている。信大は、地方の大学では比較的珍しい「全国区」なのだという。多感な時期を過ごす学生時代。全国から集う経済学部の学生たちが、信州・松本という

独特の「風土」のもとで成長し、社会に大きく羽ばたいていくことを願っている。

転んで起きた 五年間

長澤 靖真
(1987年入学)

この原稿が載るころは、松本もうらかな春の陽に包まれていくことと思う。私も卒業から二十年が経つかと顧みると、劣等生としてあの頃を過ごした記憶が苦しい閉塞感とともに思い起こされる。

昭和六十二年は国立大の複数回受験が復活した年で、当時の信大経済の二次試験は、東京で受験でき、また数学と小論文のみを試験科目にできる「ユニーク入試」を導入していた(英語は私の超苦手科目で、英語が筆記試験に課された大学は結果的にすべて不合格であった)。そのおかげで初めて松本駅に降り立ったのが合格確定後という志願者にあるまじき状態で、受験から解放される嬉しさと、新生活への不安と、コンタクトレンズの嫌悪感(それがスパイクタイヤによる粉塵のせいと知るのはずっと後である)が複雑に絡んだスタートであった。

私は薦められるままに桜橋の賄いつきの下宿に入居したが、工学部の教養留年の先輩方とつるみ、徐々に徹マンとジャスコでのバイトとの往復に明け暮れていた。結果、ご多分に漏れず教養留年の憂き目にあう(その年は四人の下宿生全員が留年し、おばさんに史上最悪といわれ全員退去が命じられた)。岡田松岡での单身住まいになってからは、留年生が教養単位不足分しか受講できないことを

良いことに、今度は運転代行のアルバイトを毎晩するようになっていた。運転代行は二人組の仕事だが、社会経験豊富なアウトローの従事者が多く、得られる知識は新鮮であった。酔客の相手も勉強になった。凍みたアスファルトから湯気のように冷気が漂う中、お客を送り届けた堀金、四賀、山形で雪明りの夜空を見上げ、漠然とした将来への不安と葛藤したのも今となっては懐かしい。

平成に元号が変わり、何とか学部へ仮進級(！)するも、経済本流の講義は面白くなく(というか何を言っているか理解できず)受講は気乗りしなかった。そんな中、ゼミを決めなければならなくなり、居候同然で寝泊りさせてくれたというK君が経営ゼミにすることという理由だけで自分もそこに決めた。経営学のO教授は独特の風貌と物言いが特徴的であったが、劣等生(当時「ピンク組」と呼ばれた)にも居場所と仕事(?)を与えてくださり、またO教授の講義が月曜の1コマ目なのが幸いし、少しづつ他の講義にも出る習慣ができていった。時遅く学部一年目は二度目の留年となったが、その春「お前は卒業しろよ」と言い残し、下宿留年組は全員中退していった。今思えば彼らとは、県の森や大学祭で活動する「遊閑人」という仲間が私にはいたことと、サークル信濃路研究会で北アルプスの山歩きを覚えられた事ぐらいの紙一重の差しかなかったかもしれない。

学部二年目は受講制限がありながらも経営と法学系を中心になんとか単位を取り揃え、辛くも四年に飛び級できた。四年になっても教養の経済学(！)と英語を履修する有様だったがバブル崩壊の直撃を受ける前に、なんとか卒業に滑り込むこととなったのは、今と

なつては神様のいたずらのようにさえ思える。

つながること 伝えること 分かちあうこと

井出由紀子
(2005年入学)

部屋の片隅の引き出しの中には、今も学生証が眠っている。表面に付いた傷跡は当時私が経済学部の情報室に出入りしていた時についたものだ。今となつては良き思い出の跡なのだろう。大学を卒業し、早いもので三年が経ようとしている。当時を振り返ってみて、今の自分を考えてみた時に、「つながり」という言葉がふさわしい。

私を支えてくれた恩師、夢を語り合った友人、信州の人々とのつながりのお陰で人生が大きく変わったといっても過言ではない。地元の大学なので、受験科目が有利だったという安易な理由で大学に入学したのは二〇〇五年春。当時の私には、まだやりたい仕事も分からず、夢さえよく分からず、入学式を迎えた気がします。しかし、経済学部の必修科目である簿記を勉強しているうちに漠然と会計に携わる仕事に就きたいと感じた。また、大学OBからの職業論の授業を受け、公務員として働くことに魅力を感じ、現在の国税専門官という公務員の道を志し、就職した。

友人とのつながり。これは大学時代にとっても大きな割合を占めていた。まず、大学時代は一年間寮で過ごしていた。二人部屋での生活や寮祭の企画をしたことなどは今となつては良き思い出である。寮では全国色々な所の出身の友人がいたので、今でも時間を見つけて友人を訪ね、旅行に行くことも

ある。

そして、留学生との交流も私の大学生活や今の私を築いているものだと考える。経済学部には多くの留学生が勉強していて、私は留学生チューターとして彼らとともに勉強していた。休日は皆で長野県の各地を巡ったりして、長野県の歴史や自然について学んだ。今でも、コミュニケーションサイトのFacebookを通じて、近況報告をシェアしたりしている。仕事で悩んだりつまづいたりしたときに彼らとの交流に励まされる。また、今の職場でも外国人等含め多くの住民と触れ合う機会があるため、分りやすく伝えること、相手の気持ちをつかちあうためにはどうしたらよいのだろうか当時の記憶が私を支えてくれる。

昨今、絆ということばがクローズアップされている。だからより一層人とのつながりが重要なかもしれない。人は人との交流の中で成長するといわれる。私は恩師や先輩に教えてもらい成長してきた。今なお、職場では上司に教えてもらっている。これらを後輩に伝え、分かちあうことも喜びである。

今、大学生生活を振り返って、やっていて良かったこと、もう少しやってあげれば良かったことをまとめてみたいと思う。

①海外留学である。私の場合は留学といっても、オーストラリアに一月、カナダに二月月なので、短期間であったので、今思うと長期間留学すれば良かったと思った。今まで海外へも行ったこともない旅行も一人で行ったこともない私であったが、一念発起、アルバイトで貯めたお金で海外へと留学を決めた。現地ではホームステイをしたのだけれど、最初は英語も分

からずに気持ちでつながっているような感じであった。日本の外から日本を見ることは中々出来ない経験なので、物の見方を培うのは最適であった気がする。又、何より現地の英会話スクールで外国人の友人ができたことは今なお貴重な財産だと思っている。

②インターンシップ、アルバイトである。仕事ということについて一番身近に感じた機会であった。ただ、両者とも私が経験した職種は少なかつたので、色々なアルバイトに挑戦するのも良かったと思っている。挨拶の仕方やビジネスマナーを勉強することが出来たことはもとより、お金を稼ぐことの大変さを痛感し、父母に感謝したい、と感じた記憶がある。

③趣味を見つけていることである。仕事をしていてストレスを感じる時もある。そのような時に趣味があると良いストレス解消法になる。私は、マラソンと登山である。契機はマラソンについては、大学の授業で履修したことである。その時のマラソン大会で完走したことが自信になり、以後、ランニングが趣味である。今でも年に数回は大会に出ようと努力中で夢はホルルマラソンで完走することである。登山は、大学時代に友人と富士山に登山したことが契機で、北アルプス、南アルプスを登頂し、目標は日本百名山を制覇することである。

時に行く先を見失うことがある。一步を踏み出すのが不安なときがある。自分で考えて努力しても思うようにいかない時は、周りの人と話をしてみると良いのだと感じた。人生のヒントがそこにはきつと隠れているのだと信じて私は今も踏み出すことを恐れないようにしたいと一步一歩、人生という名の大きな山に登頂し続けたい。

東京同窓会に
参加して

青井 智弘
(2007年入学)

二〇一二年二月三日、信州大学東京同窓会に参加してきました。今回の参加のきっかけはツイッターで知り合った同級生からの誘いでした。

彼は仕事で信大卒のお客さまと知り合い、この同窓会に誘ってもらったとのこと、東京の地での大学の繋がりを感ぜさせられました。

同窓会では農学部の大谷先生の講演を聞きました。牛乳という身近な物がテーマですが、その成分や機能については初めて知ることが多く、興味深かったです。皆さん真剣に耳を傾け、メモを取ったり、質問を投げかけたりと何だか

学生時代が思い出されました。懇親会では大手メーカー、教員、著者、起業された方など、経歴や世代の異なる方々と交流しました。大学の異なる方々と交流しました。大学の異なる方々と交流しました。大学の異なる方々と交流しました。

十代の方々です。われわれ二十代の方や三十代の方もぜひ積極的に参加してみませんか。大学時代の楽しかった思い出話ができるだけでなく、大先輩達の有意義な話が聞けますし、繋がりも広がります。最後に同窓会幹事の皆さま、ありがとうございました。信州大学の卒業生としてより社会に貢献出来る人間に成長し、また来年も参加したいと思っております。

編集後記

東日本大震災の発生から一年。津波に一扫され、また原発によって無人化した街やむらはそのままであり、復興にはほど遠い。被災地区に在住の会員諸氏はいかにおわす祈りせざるをえない。展示のない世界だが、三・一一の記事のなかで、ジャック・アタリの比較的大胆かつ明快な予測が目についた。アタリは、欧州復興開発銀行の初代総裁やミッチェラン大統領の補佐官などを務めた経済学者・思想家である。

「今後の世界は、米帝国の衰退↓新興国を中心に11カ国(G11)が台頭する多極世界↓国家の力を超える市場が牛耳る世界↓国家の衰退に伴う紛争の続発↓世界の人々が調和を目指す超民主主義の出現」という過程をたどると予測する(『日経』二〇一二年三月一日付)。

G11は、G7+BRICSである。なかで競争が激化し、「国家の力を超える市場が牛耳る世界」が現出している。その端的なあらわれが、ギリシャに始まるソブリン・デット・クライシス(国家債務危機)である。ヨーロッパだけでは間に合わない。アメリカも、そして日本も民間格付機関による国債格付の引き下げ圧力をうけており、財政再建を強いられる。先行国は、高齢化や低成長によって、もともと赤字が大きかったが、リーマン・ショックに対処するためにケインズ的財政政策が一層拡大したのであって、その先進国福祉国家財政が、金融市場によって締め上げられて、金融財政悪化が「米帝国の衰退」の直接の原因である。かくて世界治安の維持がはかれない。紛争の続発をみる。そのあとのアタリの「超民主主義」のカギは、自由に平等・友愛」の友愛である。(事務局)

平成24年度総会／同窓会設立30周年記念行事案内

開催日：平成24年7月14日(土)
場所：信州大学経済学部 新棟 第一講義室

内容

- 13:00～ 総会
- 14:00～ 同窓会設立30周年記念行事
記念式典
記念DVD上映
記念プレゼン「私たちの挑戦から、伝えたいこと・共有したいこと」
…悪戦苦闘を未来へ…

16:30～ 記念祝賀会
場所：生協あづみホール
会費：6,000円

*3口以上の記念DVD制作寄付金を頂いた方は、無料とさせていただきます。

☆ 歴代教授の皆様への招待について

ゼミを担当されていた先生方へ招待状をお送りさせていただき、現在ご出席とのお返事を頂いた先生方は、青木達彦先生、赤川理先生、池田秀敏先生、金早雪先生、小湊繁先生、田中修先生、都築勉先生、徳井丞次先生、長瀬一治先生、野地孝一先生、樋口均先生、平松茂實先生、平山祐次先生、古澤栄一先生、美甘信吾先生、茂木信太郎先生、山沖義和先生です。(あいさつお願)

*2月末現在でのご出席者ですので、今後大勢の先生方よりご出席のお返事をいただけるものと思います。

☆ 記念品について

記念式典にご参加頂いた皆様には、ささやかながら記念品を進呈致します。記念DVD、記念ラベル付ワイン、記念木製キーホルダーをご用意しております。

☆ 出欠席の確認について

同封のハガキにより、5月31日(木)までに欠席をご連絡願います。

☆ 記念祝賀会は2時間程度を予定しております。終了後、ゼミ単位等での二次会が企画可能なスケジュールとさせていただきます。

同窓会設立30周年記念 大プレゼン大会 プレゼンター募集

皆様方には、信州大学を卒業されてから様々なお立場でご活躍のことと思います。今回、同窓会設立30周年記念行事の一環として、上記のとおり『「私たちの挑戦から、伝えたいこと・共有したいこと」…悪戦苦闘を未来へ…』と題したプレゼン大会を開催致します。

皆様方のこれまでのご経験の中から、成功体験、共有したいこと、失敗談、何でも結構ですので、ご発表下さい。皆様のプレゼンが、新たな絆や学部学生へのメッセージを創発することを願っております。また、記念祝賀会では、参加者の皆様と、プレゼンを肴に語りましょう。

別紙 募集案内をご参照の上、大勢の皆様からのご応募をお待ちしております。